

氏名	瓜生 浩子
学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第 42 号
学位記番号	看博第 3 号
学位授与年月日	平成 25 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	高次脳機能障害者と共に生きる家族の Family Hardiness—脳外傷性高次脳機能障害者の家族に焦点をあてて— Family Hardiness in the Families Living with Higher Brain Dysfunction Patient—Focus on Traumatic Higher Brain Dysfunction Patient’s Families—
論文審査委員	主査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学) 副査 教授 藤田 佐和(高知県立大学) 教授 川村 美笑子(高知県立大学) 教授 池添 志乃(高知県立大学)

論文内容の要旨

【研究目的】 Family Hardiness とは、困難に直面した家族がその困難を緩和するために行う取り組みの過程において生み出される家族の内的強さと耐久性であり、家族で協力しながら主体的に関与していく姿勢を持ち、状況改善を目指して試行錯誤を重ねる中で、困難と共存していくための対処方法を身につけ、学びや意味を見出しながら自信を獲得していくことである。本研究では、脳外傷性高次脳機能障害者と共に生きる家族が、高次脳機能障害に伴う困難に直面する中で、当事者との相互作用および社会との相互作用を通して、どのような体験をしているのかを Family Hardiness の視点から明らかにし、それらを説明することを目的とした。

【研究方法】 研究デザインは質的記述的研究である。対象者は、脳外傷性高次脳機能障害者と共に生活している家族で、主に当事者に関わっている家族員を含むこととし、当事者は高次脳機能障害以外に明らかな身体的障害がないこと、受傷時の年齢が青年期から成人期であることという条件を設定した。データ収集は半構成的面接調査法により行い、データ収集期間は平成 23 年 1 月～平成 24 年 3 月であった。分析方法には Grounded Theory Approach を用いた。

【研究結果】 対象者は 17 名で、当事者の母親 10 名、父親 2 名、妻 5 名、平均面接時間は 128 分であった。分析の結果、脳外傷性高次脳機能障害者と共に生きる家族が直面する特有の困難や課題として、『当事者の脆弱性』『当事者の常識欠如と思考偏向』『常に爆弾を抱えたような生活』『引きこもりによる当事者の退化』『社会の偏見』の 5 つが見出された。また、脳外傷性高次脳機能障害者と共に生きる家族の Family Hardiness として、537 個のテーマから、『伴走する』『育て直す』『アイデンティティを取り戻す』『立ち向かう』『常同性の中で生きる』『日常の中に障害を取り込む』『社会に戻る』の 7 つの局面と、各局面の特徴を表わす 38 個の概念が抽出された。

【考察】 脳外傷性高次脳機能障害者と共に生きる家族の Family Hardiness の 7 つの局面から、『伴走する』『立ち向かう』からなる『二人三脚で闘う』軸、『育て直す』『アイデンティテ

ィを取り戻す》からなる『再生に挑む』軸、《社会に戻す》からなる『社会で生き抜く』軸、《常同性の中で生きる》《日常の中に障害を取り込む》からなる『調和を創成する』軸、の4つの軸が見出された。脳外傷性高次脳機能障害者と共に生きる家族の **Family Hardiness** は、「家族員が突然に脳外傷性高次脳機能障害となり、様々な困難に直面した家族が、その困難を緩和し乗り越えていく過程で生み出され発揮される家族の内的強さと耐久性であり、家族が当事者と『二人三脚で闘う』ことを引き受け、それを源泉として力を発揮し、『再生に挑む』ことを続け、『社会で生き抜く』闘いをし、自ら『調和を創成する』こと」と定義され、《伴走する》《育て直す》《アイデンティティを取り戻す》《立ち向かう》《常同性の中で生きる》《日常の中に障害を取り込む》《社会に戻す》の7つの局面から構成されることが判明した。また、7つの局面のそれぞれに脳外傷性高次脳機能障害の特徴が絡まり合い、すべての局面が関連し合っていた。

審査結果の要旨

瓜生氏による「高次脳機能障害者と共に生きる家族の **Family Hardiness** —脳外傷性高次脳機能障害者の家族に焦点をあてて—」は、質的な研究デザインに基づく博士論文である。「高次脳機能障害者と共に生きる家族」の生活に臨床家として関心を持ち、家族会に参加し、家族の機能との中で生きていく家族の逞しさやしなやかさに遭遇する経験を重ねてきた。これらの経験を基盤として本研究のテーマに辿り着き、**Hardiness** の視点から現象に光を当てて、本研究に取り上げるに至っている。

17 ケースの家族員からデータ収集をし、「**Family Hardiness** が表れている現象として 639 個の「テーマ」を抽出、38 個の「概念」を生成した。さらに、高次脳機能障害者と共に生きる家族の **Family Hardiness** の 7 「局面」を特定するに至っている。すなわち、高次脳機能障害者と共に生きる家族の **Family Hardiness** は、《伴走する》《育て直す》《アイデンティティを取り戻す》《立ち向かう》《常同性の中で生きる》《日常の中に障害を取り込む》《社会に戻す》という 7 つの局面によって成り立っていることを明らかにしている。これらの結果から、高次脳機能障害者と共に生きる家族は、『二人三脚で闘う』『再生に挑む』『社会で生き抜く』『調和を創成する』を織り成しながら逞しく生きていくことを導いていた。

本研究の成果は、研究対象者に向かう瓜生氏の真摯な態度、共感的な姿勢、そして、家族自身が経験を振り返り語ることを可能とする優れた問いかけによってもたらされたものである。家族との複数回の面接、さらに、平均的には 2 時間という語りを、家族の語りの断片をも逃さないという姿勢と分析力によって、現象から概念を抽出することができている。

本審査委員会では、瓜生氏の優れたデータの収集能力・データ分析能力によってもたらされた本研究の成果は独創的であると判断し、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であると判断した。すなわち、高次脳機能障害者と共に生きる家族は、困難ななか、《伴走する》《育て直す》《アイデンティティを取り戻す》《立ち向かう》《常同性の中で生きる》《日常の中に障害を取り込む》《社会に戻す》ことを行い、**Family Hardiness** を獲得していることを明らかにしたことは、本研究の独創的な点であり、家族看護学の発展に貢献すると思われる。たとえば、本研究の成果の一つは、家族が《伴走する》ことであったが、認知機能の障害を有する家人に対して、家族は補助自我の役割を取りつつ伴走することの意味を明らかにしていることなども、

独創的な発見である。さらに、高次脳機能障害者と共に生きる家族が、二人三脚で闘いつつ、困難を乗り越えるべく、家族としての再生に挑み、社会のなかで生き抜く覚悟をもち、調和を創成することに向かっている様相を明らかにしたことにより、この成果に基づいて家族介入を発展させていく道を切り開いたことにもなる。しかしながら、研究の成果は、病の軌跡が比較的長期にわたる家族からのデータが中心であり、そのために、今後さらに研究を継続して発展させていくことを期待する。

本審査委員会は、本論文は、研究への着眼点、洗練された研究手法、研究成果の独創性、論理的な論証、実践への適応可能性から、家族看護学の発展に貢献する優れた学術的価値のある博士論文であることを認めた。